

大阪府協会ニュースレター 2009 《別冊》

目次

総力特集 「大阪・関西の今後を考える」

現況レポート「動き出した関西」【土屋俊平】・・・P 2

～投稿～

「楽しみを広げよう」【村越真】・・・P 3

「オリエンテーリングの輪を広げるために」【藤島由宇】・・・P 5

「今、必要なこと ～オリエンテーリングの普及を考える～」【西村徳真】・・・P 6

「今後の大阪、関西について考える」【野澤建央】・・・P 9

「ローカリゼーションへ」【鹿島田浩二】・・・P 12

「関西への期待」【松澤俊行】・・・P 14

「関西オリエンテーリング界に向けての期待など」【番場洋子】・・・P 15

「今後の大阪、関西について考える」【宮城島俊太】・・・P 16

「オリエンテーリングが面白くない」【愛場庸雅】・・・P 18

「甦れ “打倒関東”魂」【瀧川英雄】・・・P 19

【総力特集】 大阪・関西の今後を考える

特集の狙い

本特集は、「2009 ニュースレター」の一つの目的「大阪・関西の活性化」を促すことを狙った企画である。

特に、関西以外の方々からの投稿を掲載することを重視した。そもそも関西という狭いエリアだけで物事を考えることは適当ではないし、外からの意見・指摘が我々に新たな視点や刺激を与えてくれる、と考えたからである。村越・J O A専務理事をはじめとする多くの方々からいただいた投稿は、こうした狙いに応えるものだと感じている。

目次をご覧いただいてもお分かりのとおり、府協会メンバーを含む投稿者の顔ぶれは、

ローカル誌としては破格の豪華さと言ってよい。これはまさに、他地域の方々が大阪や関西に期待を寄せていただいていることの証だろう。本特集が、今後の大阪・関西に何らかの良い影響を与えるであろうことを確信している。

ご多忙の中、執筆いただいた皆様には、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。
(編集者：土屋俊平)

現況レポート

動き出した関西

土屋俊平

投稿原稿の掲載に先立ち、関西オリエンテリング界の活性化につながると期待される幾つかの動きを紹介させていただく。

学生支援に向けた取組み

近畿OL連絡会では学生クラブの支援が議題として挙がっていたが、本年1月の連絡会での議論から、朱雀OK・金谷氏の旗振りにより、いくつかの具体的な行動がスタートすることとなった。まず2月21日の学生2日間大会会場で、学生と社会人が意見交換した結果、社会人クラブが関西各地で練習会を開催し、新歓行事に活用してもらうことが決まった。クラブ員減少により新歓行事の実施が難しくなっている学生クラブにとって、効果的支援となることが期待される。また、学生支援の動きを継続的なものとするべく、新たなメーリングリストも開設された。

関西地図製作所・西村氏の取組み

関西地図製作所を率いて地図製作や大会運営を行ってきた西村氏は、常設パーマネントコースの設置など普及に向けた新たな取組みを始めている。今後も関西を拠点に活動するとのことであり、関西活性化への貢献が大いに期待される。

OLCふるはうす・三上氏の取組み

本誌(本冊)8ページに掲載のとおり、福井県を拠点に活動している三上氏が、関西を中心に地図製作や少人数運営での大会を開催していくことを表明した。競技機会の減少が課題となっている関西にとっては、注目すべき取組みである。

今後は、こうした新しい動きを関西全体でどう盛り立てていくかがポイントとなるだろう。ごく少数の人が活発に動いても、それを支える人がいなければ、発展は望めない。身近なところでオリエンテリングを楽しもうと思えば、我々自身が何らかの形で参画・協力していくことが不可欠であり、まずはそうした意識を共有することが必要だと思う。

投稿

楽しみを広げよう

村越 真 (JOA専務理事)

現在の大学に赴任して、オリエンテーリングクラブの顧問になってから愕然としたのは、「義務感でオリエンテーリングをしている奴がいる」という事実だった。大学のクラブは必ずしもそのスポーツを主たる目的にしている訳ではないし、ましてや各部員にはそれぞれの思惑がある。大学における「居場所」を求めてクラブに所属しているケースもある。だから、「オリエンテーリングをやることは居場所を得るための義務」ということになるのだろう。それは大学教員としては分からぬでもない。しかし、長年好きでオリエンテーリングをしてきた自分には、悲しいことに思えた。

社会人のクラブの場合、それぞれに生活があり、仕事、家庭、地域、様々な人間関係の中で生きているのが普通だから、嫌だったらオリエンテーリングをしなくなるだろうし、クラブも比較的それに対して寛容なので、学生ほど「義務だからやる」という人は少ないかもしれない。それでも、活動の幅がもっと広がればもっとオリエンテーリングが楽しく、それが人生の豊かさにつながるのではないかと思える時は多い。

どうしたらオリエンテーリングをもっと楽しめるのか。ぜひそれをどん欲に追求してほしい。この30年間、関西のオリエンテーリングを見てきた経験からすると、関西はこの点については、歴史・文化的な由来を持つのか、先進的に思える。そこにぜひ日本全体を巻き込んでほしいものだ。

たとえば、昔からオリエンテーリング界(主として競技としてのオリエンテーリングをする人は特に)は全体として一般への普及にあまり熱心ではなかった。僕自身、自分が現役の競技者であった時にはそうだったのだが、ここ10年ばかり様々な対象にオリエンテーリングを提供する活動をしていると、その事が時間やエネルギーを吸い取るというよりもむしろエネルギーの源泉になっていると感じることの方が多い。

地図を片手にゴールに走り込んできて、「もう一回やりたい!」という子どもを見ると、勇気づけられる。ピラを片手に遠くからやってきた参加者を見ると、苦労も吹き飛ばす。イベントをプロデュースするというのは、ある意味で演出家のようなものだ。

参加者には失礼かもしれないが、自分が準備した舞台上で、参加者が期待通りのパフォーマンスや反応を見せるのがイベントプロデュースでの最高の喜びである。国際イベントであれば、各国のコーチたちとの丁々発止のやりとりも楽しい。2005年の世界選手権では、最初のチームリーダーミーティングでは、フィンランドの監督のトッテが、「男子と女子のコース距離は**m(忘れたが)しか変わらないのに、ウィニングタイムは1分違うだけだ。本当にこのタイムで走れるのか?」と先制攻撃をしかけてきた。「トッテ、2000年のワールドカップのチームリーダーミーティングを覚えているかい?君は今回と同じような質問をしたよ

ね。僕は『確かに、設定通りじゃないかもしれないが、5%と違わないはずだ』といった。結果はどうだったか覚えているよね。60分のウィニングに対して、エンマが63分で走っただろう」かわいそうに、トッテはその後3回のミーティングで、一回も質問をしてこなかった。

WOCで監督たちを手玉に取るというのは、誰にでもできる経験ではないだろう。しかし、コーチングや合宿のお手伝いなら誰でもできる。ジュニアや学生を対象にした合宿は、大変だが楽しい。彼らはよつ情熱ある目標を口にする。だが、行為はだいたいにおいて甘く、それでいて態度は硬い。それに対して具体的行動やスキルの面で問いつめて、追い込んでいくと、ある時ふっと彼らの目つきが変わるのに気づく。何度やっても、「よかった」と思える瞬間である。

現在では地図調査は、多くの人の手から遠ざかってしまったが、中学生のころから地図を作っている僕としては、これは残念に思う。有史以来の地図作成の歴史を追ったウィルフォードの大著「地図を作った人々」で、グランドキャニオンの地図をリメイクした測量士が、「今日私たちが仕事をした分だけ、人類の知識が増えたのだ」というシーンがある。世界選手権の地図調査の日々、何度このフレーズを頭の中で反芻したことが。それが処女トレインであれば、どんなささやかな地図であっても、間違いなくあなたの調査したことは、「人類にとって新しい知識」なのだ。

オリエンテーリングの近接領域にも目を向けてみよう。オリエンテーリングの黎明期には多くの登山者が、地図の勉強のためにオリエンテーリングを始めた。現在でも年輩の熱心なオリエンティアの中にはそういう方が残っている。日本では年間2000人の人が山岳遭難に見舞われるが、そのうち40%が道迷いであり、30人ほどが亡くなっていると推定されている。彼らが地図を読めていたら、彼らの運命は違ったものになっていたかもしれない。しかし、本来地図読みが必要な登山という世界でも、地図やコンパスをきちんと使える人の数は少数派である。オリエンティア自体は意識していないかもしれないが、私たちの持っているスキルは、サッカーならまさに日本代表とか高校選手権上位校レベルなのである。もちろん、エリートのトップともなれば「ファンタジスタ」である。オリエンテーリングで身につけたナビゲーションスキルは、登山やアウトドアの世界にも生かせ、また貢献できるかもしれない。

最近はトレイルランニングが大ブームだ。オリエンテーリング界でも20年以上前からこうしたレースに参加してきた人、また運営してきた団体がある。関西でもダイトレとか六甲山縦走はもちろん、京都オリエンテーリング協会が東山のトレランを20年もやっている点は、その先進性を示すものだ。私なんぞに言われなくても、きっとこうした周辺活動にも積極的に関わっていつてくれることを期待している。彼らとつきあっていると、オリエンテーリングの特徴や良さ、また足りない部分、そういったものが複眼的に見えてくる。

ぜひ、いろいろな側面で関西が大きく飛躍することを期待している。



オリエンテーリングの輪を広げるために

藤島 由宇（三条オリエンテーリングクラブ会長）

オリエンテーリングの輪を広げるために、最近始めた事を紹介したいと思います。

新潟県内ではオリエンテーリングの大会は年に数回しか開催されません。そこで聞こえて来るのは「オリエンテーリングをする機会が無い」という声ですが、「大会が少ないなら練習会を開けばいいじゃない」という発想のもと、今年に入ってから新潟駅前の中心市街地地区をトレインとして土曜日や休日の夕方からスプリントの練習会を月1回の定例化を目指して実施し始めました。マップは去年の春からこっそり作っていたものを使用しています。

最初は新潟市内在住のオリエンティアを対象にしておりましたが、その中の1人である京都大学OBの^{ぶなざわわたる}樽澤巨くんがトレイルランニングのSNSに加入しており、そこでオリエンテーリングの練習会がある事を告知してくれました。そのおかげで1月の第1回は2名、2月の第2回では12名のオリエンテーリング初参加者の皆さんに集まっていただけ、私や樽澤くんらの経験者が初参加者にマンツーマンで（あるいは少人数のグループに分かれて）コンパスの使い方や整置の方法などをレッスンし、オリエンテーリングを楽しんでもらっています。

この練習会を始めた事により、未体験の人がオリエンテーリングに最初に触れる機会は、大会よりもむしろ練習会の方がふさわしいと考えるようになりつつあります。と言いますのは、大会における参加者は言わば「お客さん」でありレースを楽しみさえすれば良く、準備は役員が全て行います。しかし練習会では、コントロール（フラッグは無くSIステーションのみ）の設置は私が1人で行いこそすれ、撤収は参加者の皆さんに手分けして手伝ってもらいます。この「参加者に撤収を手伝ってもらう」ことが、オリエンティアとしてのホスピタリティを育む第一歩なのではないかと感じたものです。

練習会が終わった後は、参加者全員で一緒に夕食を食べに行きます。電車で来た人はビールを飲んでももちろんOKです。この「アフター練習会」の時間を持つ事も、オリエンテーリングの仲間作りに重要なファクターだと思っています。

梅田、道頓堀、通天閣あたりでオリエンテーリングが楽しめたらどんなに素晴らしいことか...！大会じゃなくても良いのです。いつか実現される事を期待します。お互い頑張りましょう😊

今、必要なこと

～ オリエンテーリングの普及を考える～

西村 徳真（関西地図製作所）

はじめに

本稿は、基本的に客観的事実に基づくものではなく、私自身が見聞き、私の主観をもとに書かれている。そのため、事実と違う記述とそれに基づいた誤った見解があるかもしれない。そのような点を見付ければ、ぜひとも教えていただきたい。また、ここに示した見解に対する賛否や新しいアイデアなども教えていただければ実に幸いである。アドレスは、[magi.melchior.ex \[at mark\] gmail.com](mailto:magi.melchior.ex[at mark] gmail.com) 西村徳真まで。

「普及」というものは、本当に分からない。

オリエンティアの減少は、ずっと前から言われており、一部のオリエンティアの中では危機感は共有されてきているが、それに対する有効な打開策はほとんどなされていない。五里霧中、暗中模索、そんな言葉が実に良く似合う。

理想と現実

では、どんなオリエン界になれば、普及は成功したと言えるだろう。

私の成功イメージは、「オリエンティアの数を上昇軌道に乗せる事」だと考えている。すなわち、毎年コンスタントにある程度の人数がオリエン界に供給され、流れていく人を差し引いた「純増」の数で常にプラスを維持できる。そんな世界だ。

翻って、現状を見てみよう。オリエンテーリングの輸入から40年以上が経過し、黎明期の国家からの支援が途絶えた今、有力なヒトの供給源はほとんど大学クラブに限定され、さらにそれが、今や崩壊寸前になってしまっている。

このギャップをいかに埋めていくか、そのための戦略を早急に確立し、OL界全体で共有していく必要がある。今日はその戦略について、考えてみたいと思う。そのために、普及に必要な要素を3つに分けてみた。すなわち、

- ・人財供給源の確立
- ・練習環境の整備
- ・目標となるイベントの共有

である。

そして、最も重要なのは、これらのアクションを起こす、OLクラブ、そして一人ひとりのオリエンティアの意識改革とコミットメントだ。以降、これらの要素一つ一つに

ついて順番に見ていく

人財供給源の確立

最大かつ喫緊の課題は、大学クラブの新人獲得体制の早急な立て直しである。

まさにこれは先日の近畿OL連絡会でも議題に上がったことであり、社会人クラブが練習会の運営を行うなどの支援策が決定されたようである。クラブの垣根を越えたこのような動きを主導した朱雀OKの方々には、素直に敬意を表したい。このような動きを起こしたということは、それだけで大きな意味がある。

しかし、人財供給源は果たしてそれだけで良いのだろうか、と私は思うのである。現状では社会人クラブの新人獲得の手段は、学生クラブの卒業生を吸い上げるという方法に限定されているところが多く、しかも、それも積極的に行われているのはごく一部のクラブに留まっているように感じる。私は3ヶ月ほど前に京都OLCに入ったが、ぜひそのクラブを通して、**社会人クラブが積極的にオリエンティアを増やすというモデルケースを作って行きたい**と考えている。そのため、非オリエンティアへのアプローチを積極的にされている社会人クラブの事例（例えば、OLC吉備路や愛知県など）はぜひ聞いてみたい。

また、JOA主催の普及方法研修会で知り合った三条OLCの藤島さんは、OLのスポーツ少年団を作るという企画をされている。このようなスポーツサークルへの誘導は、子供と定年後のシニア層が中心になるであろうと思うので、この企画は個人的に非常に注目している。

練習環境の整備

この点については、まさに我々関西地図製作所が目指している部分と言えるだろう。OLをするフィールドがなければOLの普及はありえない。OLを始めたいと思った人を連れて行く体験会と、続けたいと思った人に活用してもらおう練習機会の提供は重要である。

まず、初心者への導入として、京都府協会が取り組んでいるのは、パーマネントコースの再整備である。これは以前ニュースレターに投稿させてもらったので、そちらを参照されたいが、現在宇治市の「太陽が丘」におけるパーマネントコースの設置許可を求め、行政との交渉を行っている。もしこれが実現すれば、公園に立ち寄って興味を持ってもらった人に体験してもらうことが出来るし、さらには初心者を連れてOL体験をしてもらう格好の場所になると考えている。この企画が成功すれば、都市公園や森林公園のマップ化、パーマネント化を次々と進めることで、豊富なOL体験機会を提供することが出来る。

次に、練習機会の提供である。特に大学生以下のオリエンティアにとって、豊富な練習機会が存在することは、OL界に繋ぎ止めるための重要な要素となる。しかし、現状として十分な数の練習会が開かれているとは言い難い。京都大学のようなビッグクラブ

では現役生やコーチが内部向けの練習会を頻繁に開くことが出来るが、小さなクラブではそれが出来ない。結果、小さなクラブがさらに衰退してしまう。だからこそ、今、各クラブが練習会をもっともっと外部に開いていくことが求められていると思う。外部の人間を呼ぶと、会計上運営上負荷がかかり、なかなか積極的になれないという事情があるが、それをなんとかやりくりして実現していつてもらいたいところである。

目標となるイベントの共有

大学生以下のオリエンティアにとって「インカレ」は、本当に大きな存在である。しかし、社会人オリエンティアにとっても「目標となるイベント」は引き留め策として重要である。

社会人になると、なかなか練習のためのOLに行こうとせず、七人リレーやウェスタンカップリレーなど、大きなリレー大会への参加がモチベーションになることが多いのではないだろうか。それならば、リレー大会というのは、オリエンティアの引き留めのためにとても大きな役割を担っていると言えるだろう。だからこそ、ウェスタンカップリレーなどの重要なリレー大会を毎年きちんとしたクオリティで開かれるというのはとても大きな意味を持っている。

「目標をクラブで共有する」ことが大事なら、例えば年間いくつかの大会を指定して、それには出来るだけ参加するというルールを作ってはどうか。大会後に飲み会も併設すれば、ぐっと楽しみは増すと思う。そんな取り組みを、私は今後京都OLCの場で実現して行きたいと考えている。

人・組織

ここまで、普及のための要素を3つに分けて分析し、提案を試みた。前半は主にオリエンティアの「供給」に対するアプローチで、後半になるにつれてオリエンティアの「流出」を防ぐためのアプローチとなっている。

しかし、どんなに戦略を練ったところで、それ以上に必要なものがある。それが、「自分たちの仲間を増やそう、仲間とずっとオリエンターリングを楽しみたい」という、オリエンティアの一人ひとりの気持ちと、それに伴う行動である。

これが欠けた戦略は、何の成果も出さないだろう。

もし、誰もそんな気持ちを持ってないのであれば、きっとオリエンターリングは普及する価値すらないスポーツなのだと思う。しかし、現実には多くのオリエンティアがOL界の将来を憂い、OLのために活動している。そんな多くの人に愛されているスポーツを、私は絶対になくしてはならないと思う。

だが、冒頭に書いたように、普及のためのアプローチはまだまだ確立されておらず、各クラブが単発で何らかの取り組みを行っているだけではないだろうか。だからこそ、

今本当に大切なのは、「普及させたい」という、オリエンティアの思いをお互いに刺激しあい、具体的かつ戦略上有効な行動に落とし込んでいく仕組みを作っていくことだ。そのためには、今までのクラブベースの活動だけでなく、クラブ横断的な組織、すなわちJOAや学連、近畿OL連絡会などの役割が重要である。

先述したように、近畿OL連絡会から出発した学生クラブへの支援活動が動き出し、また、「太陽が丘」パーマネントコースのプロジェクトでは京都府の吉田理事長が直々に、率先して行動を起こしていただいている。

このようなムーブメントを単発で終わらせることなく、クラブ間協会間での連絡を密にし、大きな動きにしていくことが、今のオリエン界には求められているのではないだろうか。

今後の大阪、関西について考える

感動なき世界に発展なし、積極的にいこう！

野澤 建央（大阪OLC）

土屋さんも、難しい題を与えてくださいますね。私がこの種の投稿をしますと重苦しくなりますが、みなさま最後までお付き合いください。

さて、競技人口の減少が叫ばれて久しくなりますが、競技人口の減少は、OL活動のパワーそのものの退化を意味しているのではないのでしょうか、すなわちそれは学生の問題だけではないと私は思います。地域クラブも、発足当初に比べれば、OLそのものに取り組むエネルギーがはるかに貧弱になっているといえます。会員数が増加している地域クラブでも、主催大会の開催は、数年に1度程度、しかもトレインはリメイクか、パークとかいったように限られたものになっており、本格的なトレインでの開催は極端に減少しています。公認大会も開催が減少。とくにカテゴリーAは、1年に1回あるかないかです。これは別の角度から見れば、競技会開催等が飽和状態に陥っているともいえます。開催が減少しているのに飽和状態とは、競技人口が減っているのに競技会が多すぎることです。OLはこのまま衰退し、なくなってしまうのか？その結果が、見方はいびつかもしれませんが、他のスポーツに参加者が流れアウトドアスポーツの隆盛ともつながっているのかもしれませんが、他方、未だにパーマネントコースの活用をされている方もおられます。しかしパーマネントコース利用者からの競技OLへの移行は、今後は起こらないと思われれます。なぜならパーマネントコースから競技OLへの移行機会が失われてしまっているからです。OLが日本に導入され、余暇・レクリエーション

活動が活発であった黎明期なら、個人の情報源（口コミ等）あるいは会社での研修を通じパーマネントコースを周り、その結果としてOLの魅力にとりつかれ、次に来るあふれるがごときOLに対する好奇心から競技OLを見つけ出し、競技会に参加する。そして競技会に参加するうちに（地域）クラブの存在、同好の仲間の存在を知る。そしてライバルを得てさらに打ち込む。こういった流れがあったと思いますが、いまは生活環境・価値観の変化、娯楽・趣味・健康志向の楽しみ方の多様化により、OLにおいて競技者の供給源は、大学でのOL経験に限られてしまっているといえます。全国には毎年開催するOL大会で700人も参加者を集めているものがあります。また地域に根付いて一定数の参加者を確保して毎年開催されているOL大会もあります。しかしながらそれら大会の参加者からの競技OLへの移行もありません。加えて唯一の競技オリエンティア供給源ともいえる大学OLクラブの存続が危うくなっています。非常に由々しき事態といえるでしょう。しかしながら、これも時代の流れかもしれませんね。今、やはりつつあるロゲインも今後の競技人口の成長はまだ続くかもしれませんが、爆発的かつ継続的な競技人口増には、やはり限界が近いと思います。現に一大ブームといえる「トレイルランニング」でも、通路の傷から自然破壊まで問題が昇華し、今後ブームの拡大とともに、こういった問題点も大きくなり拡大に転機が訪れようとしています。表現、意味合い、たとえとしては適切ではありませんが、「奢る平家も久しからず、盛者必衰」。少なくとも現在の競技OLは、時流の主流に乗っていないことは確かであると思われる。

現在は、その事実を正面から捉え、時間をかけて、いろいろな取り組みをしていくべきときであろうと感じます。そういった中で気になるのは、肝心の学生オリエンティアにその危機感が外から見て感じられない点です。部員の獲得に泥臭いながらも徹底的に取り組んできた者としては非常に物足りなさを感じるのです。ものごときれいごとだけでは、前進できない時期があると思うのです。今がそのときかもしれません。社会人クラブが学生クラブを支援するなんて本来ナンセンスでしょう。学生の自主独立・自治の精神はどうなったのでしょうか。学生側ももっと積極的になって欲しいものです。何をどのようにしてよいかわからなければ、貪欲にわかる人に聞くぐらいの姿勢が必要ではないでしょうか。その姿勢がないことが非常にもどかしいです。現在の地域クラブを率いている若い世代は、ほとんどが学生クラブ出身です。これらの人々も、体面にこだわることなく、もっと母校に介入すべきではなかったでしょうか？個人的には、やるだけのことをやって受け入れられず廃部となった苦い経験を持つ筆者としては、今のその姿勢にはものすごく腹立たしいものを感じます。目を大阪以外に移すなら、京都方面は大学も多く、また距離的に山が近かったり、OB組織がしっかりしていたりとりまく環境のよさという利益を享受しやすい得な面があり、うらやましい限りですが、比較事情ばかりを言ってもしかたがありません。大阪はとにかく動きましょ。そういった意味で、大阪府は全日本リレーを契機に10年以上経過してようやく、クラブ枠を超えま

とまり、強化合宿をおこなったり、チームミーティングを実施したり、都道府県としての対抗意識も生まれてきたことは、大きな収穫であり、この流れは絶やさないようにしなければならないと思います。現状ではこれらの取り組みも一握りの個人の力量に頼っているという危ない面は抱えており、今年はその真価がとわれる状況でもあります。大阪のみなさん、いろいろ忙しいこととは思いますが、切磋琢磨、頑張ってください。

次にOL衰退の一因について私見を述べたいと思います。OLは見ている人、OLを知らない人に感激を与えることができないスポーツであるということが普及において大きな障害となっていると思います。日本で人気のあるスポーツは、直接(スタンドでの観戦等)・間接(テレビ中継、ニュース等)を問わず、日本人の好きな逆転劇やそこにいたる過程を観客がみることができます。OLではこれがないのです。画面で選手の動きがわかる仕組みはありますが、そこには、個々の当事者である選手の表情、一挙手ごとの動きがないのです。ビジュアル区間という工夫はありますが、野球のようにランナーがたまっていく逆転劇への準備舞台ができあがる過程・ドラマの観戦、サッカーのセットプレー、ラグビーの大走りのトライ、アメフトのような攻撃時間の使い方や、インターセプトや大逆転タッチダウンパス、相撲における小兵力士が大型力士を破る場面、柔道における返し技の冴え、どれも全体のルールがわかりにくくても、感動する場面を「生」や録画で繰り返しみることができます。しかしOLにはありません。いわゆる観客が楽しめないのです。どうしても自己満足完結型になってしまうのです。市民マラソンのブームも自分が主役になれるからなのであり、それは沿道での観客があるからなのではないでしょうか？ルートを選択しなければならず、参加者がどこを通るかわからないOLでは、その2つがまったくの逆で、競技中に主役気分になることもできないし、そのパフォーマンスを見てもらうことも、また見るほうもそれを楽しめない。これは現代の社会価値通念の中では、認知され人気をだすのは至難の業でしょう。人は感動するものに、心を動かされ、価値を見出し、やってみたいという衝動にかられるのです。なんとかOLもそうなればと課題をのこし筆をおきます。

もとにもどりますが、学生はもっと地域クラブに自分を売り込んで欲しいし、地域クラブ側も複数が獲得に乗り出す、そのような活発な勧誘合戦が復活しても良いと思います。みなさん、頑張りましょう。そして大阪を強化しましょう。

最後に土屋理事の思いのこもった本ニュースレターは、一旦休止となりますが、大阪府オリエンテーリング協会から、みなさまに文字通り「ニュースレター」として、内容を連絡事項を中心とした不定期発行となりますので、よろしくお願い申し上げます。

ローカリゼーションへ

鹿島田 浩二（J O A 強化委員長）

いきなり関西の活性化からは話が違いますが、みなさんはオリエンテーリングはお金のかかるスポーツだと思うのでしょうか？時々仲間うちで議論になります。答えは人にもよりますが結構かかると考えている人が多い。用具にかかる費用は少ないスポーツです。コンパスとウェアと靴。そのほか消耗品の地図やテーピングなど。しかし高いものでも1～2万円、自転車、トライアスロン、トレイルランなど近隣のスポーツに比べても初心者には入りやすいスポーツです。大会参加費も昨今高いともいわれますが、マラソン大会（3000～10000円）やトレイルラン（3000円～15000円）と比べればむしろお値ごろ感さえあります。

それでもお金がかかると皆が感じるのは、やはり遠征費でしょう。確かに毎週末、郊外まで出かけるための交通費、人によっては月に1度くらいは何県かとなりの県まで足を運ぶ人もいます。ちょっと一泊すれば1万円ちかくがさらに上積みされる。こうして1年で計算すると年にかかるく2,30万円、あるいは50万円くらいかけている人も多いのではないのでしょうか。こうなると確かにお金のかかるスポーツになります。

日本のオリエンテーリングはそういう点で遠征が大変なスポーツともいえます。もちろん地域の大会だけに出る人も数多くいますが、少し上を目指そうと思ったり、より魅力的な大会をもとめたりするとそれなりの遠征が必要になります。関東圏の人は大会が集中しているので恵まれてますが、それ以外の地域の方は概して週末は長い距離を車や電車で過ごすことになります。その点お金だけでなく時間という意味でも大きな投資が必要になります。

時々学生を見ていると感心することがあります。金曜の深夜から車で10時間とか移動して土、日の大会に出て日曜の深夜に戻る。その熱意にはとても感心するのですが、反面これがこなせる人の数はどうしても限られてしまうだろうな、と感心することがあります。

さて、本題に入りますと、僕自身は関西の活性化、あるいはもう少し広げて日本全体のオリエンテーリングの活性化はローカリゼーションにあると思っています。地域の活動が活性化し、その地域だけでオリエンテーリングを楽しむことができることです。一昔前はより「白い」「面白い」トレイルを求めて大会の開催がより僻地に移る傾向があり、結果として大会の参加ハードルを上げてしまい普及しにくい状況をつくったといわれます。一時の中高生オリエンティアの衰退はこうした状況が要因の一つともいわれます。昨今パーク0の普及により、再び大会のローカリゼーションが進んでいる感があ

りますが、私自身はそれが正しい方向だと考えています。オリエンテーリングは、その土地の地形を生かして行うスポーツ。地域の個性があって当たり前です。日本は固有の尾根沢地形を有する国なので、その特徴を生かして競技が発展すればよい。必要以上に世界基準のトレインを求めることはない。その代わり近くで参加しやすい大会を増やし、競技人口の裾を広げることが必要に感じます。

私から見た関西の話題に移ります。私は関東生まれ関東育ちなので、オリエンテーリングを四半世紀続けている割には関西のオリエンテーリング事情にそれほど接していません。そうした私から見ての話ですが、関西パーク0やウエスタンカップリレーなど地域の大会練習会が多くあり、ローカリゼーションがきちっと進んでいる地域と感じます。そういう点では私が今更偉そうなことをいうまでもありませんが、その方向をより推し進めることが大切ではないかと思えます。

私は現在選手強化にかかわっていますがその視点からいうと、選手強化もローカリゼーションが必要です。中央集権的な強化には限界があり、地域地域で選手が強くなれるような活動があることが望ましいのです。最近では埼玉県や東京では、平日夜の集団トレーニングが行われ、社会人から高校生までと一緒にトレーニングする場が生まれています。これらは、今まで社会人クラブ、学生クラブ、高校クラブの活動が階層的に分かれていたのを、その階層を超えた交流を有むという一定の効果も見られているように思います。こうしたことが社会人のインカレやインターハイへの興味につながり、若い世代の社会人クラブ活動への理解につながります。これは中部地域でも似たような現象が見られるように思います。(私の知らないだけかもしれませんが)同じような場が関西地域であれば、より地域の活性化につながるのではないかと考えています。

そういう点から考えると関西にアクティブな中高クラブが生まれたら素晴らしいと考えます。最近中高生の活動が活性化している印象があります。中部の東海高校や、関東の麻布、桐朋の学生は各種大会に積極的に参加し、高校を超えて交流し、JWOCなどの世界を目指すことも中学生レベルから意識されるようになっていきます。このような輪に関西のクラブが加われば、ジュニアがより活性化するに違いありません。もちろん高校生クラブは簡単に作れるものではありませんが、優秀な人が多いオリエンティアでは関西で教鞭をとっている人もいると思えます。こうした人々がクラブを立ち上げ、そしてその活動を地域のローカリゼーションとして、社会人大学生みなでフォローしていけたら素晴らしいのではないかと考えます。

一方我々JOAの強化委員にも課題があります。現在委員5名のうち4名は関東在住でどうしても活動や情報が関東中心になりがちです。静岡県在住で中部以西のオリエンテーリング事情に精通している松澤さんがある程度補っていますが、本来なら関西地域在住の委員がいて地域の活動とのパイプ役を果たすべきで、我々の活動の一つの課題と捉えています。

多少散漫な内容ではありますが、私が地域の活性化というテーマで思うつれづれについて記しました。今回土屋さんに紹介頂き文章を載せさせていただきました。選手強化にかかわる人間として今後このような機会を含めいろいろな形で関西のオリエンティアの皆さまと情報交換をし、関西の活性化、さらには日本の強化を通じたオリエンテーリングの活性化に少しでもつながる活動ができれば、と考えています。

関西への期待

松澤 俊行（松塾）

私は、元々関西テレインでのオリエンテーリングが苦手でした。関西の競技者たちは典型的な関西テレインを指して、「罪に対する罰が大きいテレイン」と言います。ここでの罪とはすなわち「手抜き」を含む「手続き上のミス」の、罰とはすなわち「ロスタイム」や「気力体力の消耗」の比喩表現です。間違ったと気付いてからやり直そうとしても、そこはヤブがちな急斜面である確率が高く、復帰に時間と負荷が掛かる、というわけです。私もこれまでに、たっぴりと罰を受けて来ました。

最近に関西テレインの中にも慣れてきて、そこでの「法」に抵触することも減りました。元々、苦手なだけであって嫌いではなかったのですが、苦手意識が薄れるにつれて、関西のオリエンテーリングに対する個人的な好感度も上がっているように感じます。ナショナルチームや松塾での活動を通じて、知人が増えていることも影響しているでしょう。

というわけで、「私の心の中」というごくごく狭い世界においては、今、関西のオリエンテーリングが一つの隆盛期を迎えています。客観的なデータとして、衰退しているという事実があることは理解できますが、関西のオリエンテーリングは、少なくとも私にとって「まだまだこれからが楽しみな存在」です。少数であっても、こう考える人物がいることは、関係者の方々の継続的で、堅実な取り組みの証明となるでしょう。

会社員時代、「売る側にとっては長年売り続けてきた商品であっても、初めて手にしたお客様にとっては新商品」と言われていました。ややごまかしめいた部分があるとはいえ、大切な考え方だと思います。似たような理屈で、「ある世界が、長年そこにいる人物には衰退して見えても、新しく興味を持って入って来た人には『面白い』『将来性がある』と思ってもらえる可能性がある」のかもしれない。関係者の方には、上記文中の「ある世界」に関西オリエンテーリング界、あるいは日本のオリエンテーリング界を当てはめて考え、希望を持って欲しいと思います。

関西オリエンテーリング界を、客観的にも隆盛方向に転じさせる上では、旧来の因習や価値観に染まっていない新しい関係者を取り込むこと、そうした人々に活躍の場を持

ってもらふことが鍵になりそうです。学生クラブ出身者にも特長と魅力がありますが、そこだけに依存せず、他方面（多方面）からの人材獲得策を講じていく必要があるでしょう。ちなみに、「松塾」には現在 35 名ほどの会員がいますが、その内 15 名は学生オリエンテーリングクラブ在籍経験がない方たちです。学生クラブ出身者も、そうした方たちと接することで新しい刺激が得られ、視野が広がると言ってくれています。

私自身も、関西に期待する者として、また松塾塾長としての立場等を活かし、お役に立てる可能性を持っている（かもしれない）者として、関西オリエンテーリング界の発展に協力していければ、と考えています。関係者の皆さん、今後も宜しく願いいたします。

関西オリエンテーリング界に向けての期待など

番場 洋子（(株)堀場製作所）

先日、滋賀で行われた、京大・京女大会と、ウェスタンカップに参加しました。正直言って、関西の学生レベルが落ちているという話もあった上に、ニューマップだというし、どんな大会になっても、やるだけ偉い、と寛大な気持ちで行くぞ、と思って出かけました。が、予想に反して、とてもとてもしっかりした立派な大会で、後輩すばらしい！と本当に嬉しく思いました。

とはいっても、2008 年度、春のインカレ表彰台に関西から 1 校も立てなかった、という事実もあります。関西の学生競技レベルが下がっているのは確かなんだろうと思います。だけど、あの運営レベルから考えて、技術・伝統はまだ失われているわけではないでしょう。きっと。まだ十分、立ち直れるけれど、人がもしいなくなってしまうと、伝える先がなくなってしまう。今のうちに、取り返しのつかなくなる前に、立て直してほしいと願うばかりです。

レベルの低下の原因のひとつに、よく言われていますが、母集団の数の減少があると思います。昔は、インカレのエリートを走るために、切磋琢磨していましたが、今は人数が少なすぎて、あまり一生懸命やらなくとも走れるようになってしまっています。人数が多ければ、オリエンテーリングにかなりの時間を費やす人から、文武両道・適度に楽しむ人まで、いろんな人種の人が見られ、トップの人達に引っ張られて、全体が活性化されるものだろうと思います。

まずは、何より、新歓を頑張ってもらいたいです。暖かな陽気の日に、さわやかな公園で、オリエンテーリングの面白さを知ってもらふのと、何より、オリエンテーリングクラブの人の和に巻き込んでしまうことが一番の勧誘です。人数が沢山増えれば、自分

達の仲間が増え、その努力は確実に自分にとってプラスになります。ぜひ、熱意を持って（これが重要）頑張ってください。

学生に向けての話ばかりになってしまいましたので、最後にひとつ、関西オリエンテリング界に向けて。先日のウェスタンカップに参加して、関西のOL界の雰囲気は相変わらず、アットホームでいいなと思いました。関東は私の中では、ドライな印象があり、関西はウェットな印象です。その人間関係がとてもあたたかで、居心地が良いと思いました。ただ、関東に比べて、お子様の数が少ないように感じました。子供が遊べる会場、子供も来て家族ぐるみで楽しめる地域クラブ、というのが、さらに求められるのではないかと思います。色々な人生のフェーズでもオリエンテリングが楽しめるような、そんな雰囲気が出来ればいいと思います。

私は、関西から出て来てしまいました。やはり、関西の大会が好きだし、関西のオリエンティアのみなさまといるとほっとします。今後とも、機会があれば、是非関西でのオリエンテリングを楽しみたいと思います。皆様よろしくお願ひします。

今後の大阪、関西について考える

宮城島 俊太(Orienteering News in Japan)

関西については、あまり大会にも参加したことないし、住んだこともありません。なので情報源はメーリングリストや仲間たちからの伝聞、噂、それからJOAに送られてくる吉備路やKOLAの会報誌になります。なので、その範囲から伝わってくる情報や雰囲気、印象から書きます。

関西といえば、僕は近畿OL連絡協議会がすぐに浮かびます。このような組織があるのはいいことです。関東はそういった県のまとまりが(ないわけではないが)見えない、見えにくいので、より素晴らしく感じられます。

しかしこの会議で重要な要素の1つ、大会の日程調整については、僕は否定的な立場です。大会の日程調整をして、関西内で被らないようにするというのは、関西内のオリエンティアという限られたパイを大会間で奪い合わないにしよう、というものです。基本的にこれは運営者の都合だけの考えです。競技者からみれば、同じブロック内とはいえ、県境を越えるよりは同じ県内で大会があったほうが参加しやすいです。

普及という観点で見ても、わざわざ他県に赴いて体験するのは敷居が高いですし、多くの場所で大会が開かれればそれだけオリエンテリングを目にする人も増えます。300人の大会を1つよりも、100人の大会を3つのほうがいいということです。

もちろん、大会が3つ4つ重なる週とまったくない週があれば無駄なだけなので、理想を言えば毎週関西の複数の府県で大会が開かれているのが望ましいでしょう。これに運営の負担がどうか言うのはやはり運営者の都合です。100~200人とかの大会ならば当日の運営者は5人以下でもできます。渉外や申込受付など事前準備だけ手伝って当日は他の大会に参加するという人が相互にいてもいいでしょう。

このことから思うのですが、今は近畿とか関西とかいったものが「小さな個」を目指しているように思えます。それはそれでまとまりがあっていいように思えますが、拡大していくようには思えません。クラブなどの「個」がそれぞれ大きくなり、近畿OL連絡協議会のような大きな地域の集まりは「大きな環」を目指すべきだと思います。(もちろん、大きな組織が手を出すとか力を貸すなどと言っているわけではありません。)

関西に限らないことですが、今後の発展のために必要なこと(今できていないこと)は以下のようなことだと思います。

- ・自分(運営者)視点で考えない。相手(お客さん)がどう考えるか、その目にどう映るかを考える
- ・理想とする地点までの道のりをなるべく「具体的に」考える。
- ・欲張らない。

(1枚のチラシでオリエンテーリングの説明をしてクラブの紹介をして大会に出てクラブに入会してもらおうなんて・・・)

- ・周りの人は利用する。利用されることを望む人、待っている人もいる。
- ・調べられる情報(過去の事例など)はちゃんと調べる。

今の関西の状況は、今後の日本全体のオリエンテーリング界の行く末そのものを感じられます。ここでの盛り上げ方が日本オリエンテーリング界の未来に繋がるのではないのでしょうか。考えること・実行すること、やるべきことはたくさんあります。これからの活動がいい未来へ繋がっていくことを期待しています。

.....

オリエンテーリングが面白くない

愛場 庸雅

(OLCレオ・

大阪府オリエンテーリング協会副会長)

オリエンテーリング人口が減少している。一生懸命「普及」をはかっているが、大会参加者は減少するばかりである。なぜだろう。昨今の経済事情などから、社会人には時間がとれないという事情もある。若い世代には興味の対象になりにくいのか？工夫する、努力する、あきらめない、ことが勝利につながる地味な部分はウケないのかもしれない。

しかし実は、単純に面白くないからではないのだろうか。

私自身も、老眼によるフラストレーション、体力の低下、時間のなさ、などから大会参加数は減少し、エントリーしてもキャンセルすることも多くなってきた。参加することがしんどいのだ。そしてどうも、「ぜひとも参加したい」というような魅力的な大会が少ないのだ。

オリエンテーリングに「はまって」いた20代前半の頃、大会は貴重な存在だった。地図のレベルやコースのレベルは今よりずっと低かった。それでも楽しかった。ましてや、良いトレイン、レベルの高い地図と聞けば、万難を排して出かけたものである。あのワクワクする感触はどこへ行ってしまったのだろうか。

オリエンテーリングの魅力とは、いったいなんだろう。私にとっては、地図というものの魅力、知的な力を利用して困難を乗り越える満足感、泥んこになっても自然の中を走り回る野性的な感覚、そんなところである。未知のトレインは魅力的だ。どんなところなのだろうと想像するだけで楽しい。そして、体力のない私でも、うまく走れば強い人に勝つことが出来るというのも大きな魅力である。きちんと完走するために、より速く走るために技術力が絶対必要な要素であることが、オリエンテーリングの特徴である。迷ってしまうことにすら面白味があるのだ。

最近の大会予定表を見ていると、パークOとロゲインばかりが目立つようになってきた。いずれも、技術的、知的要素の部分が低い。パークOには、短時間で簡単に開催できる、地図作りや地元交渉などが楽、初心者に適している、参加しやすい、安全、などメリットは確かに大きい。ロゲインはランナー、アウトドア愛好家も取り込みやすい。いずれも、オリエンテーリングの「難しさ」のハードルを低くして、初心者呼び込もうとしている。

悪いことではない。

しかしこれらには、ルートチョイスとか難度の高いコントロールへのアタックといった、さらにはさんざん迷った上にやっと現在位置を確認したなどという、「オリエンテ

ーリング特有の魅力」が非常に少ないのだ。私のように、基本的に走力がないようになってしまうと、もう勝負の土俵にすら乗らない。高度の集中力と一瞬の判断力を試されるスプリント競技は、一定以上の高い走力を持ったエリート選手にのみ与えられた楽しみになってしまう。なら、公園の中を花でもめでながら自由にジョギングするほうがよほど楽しい。

パークやロゲインに参加した人は、ではそのあと、果たして「オリエンティア」になっているのだろうか？パークやロゲインでオリエンテーリングを体験した人をフォローし、本格的オリエンテーリングへ向かってもらえるような受け皿が必要である。そのためには、本格的トレインでの質の高い大会がきちんと開催されなければならないと思う。

パーク（スプリント）やロゲインが増える分、ミドルやロングの大会は数えるほどしかなくなってきた。とくにロングは、全日本とインカレだけになってしまいつつある。ロング特有の、あのしびれるようなロングレグのルートチョイスを判断するという楽しみはほとんど体験できなくなってしまった。極めてテクニカルなトレインをうまくこなすという、あの読図の楽しみを感じられる大会も少ない。

ロング競技の準備、運営は大変である。地図を作製するのは並大抵ではない。それでも、私たちは過去にずっとやってきたのだ。若い世代の人々の意識、興味の対象は変わるかもしれないけれど、本来人間が持つ知的なアプローチへの興味や楽しみ、困難を乗り越えて達成感を味わうことの喜びは変わらないと思う。そういう「オリエンテーリングの魅力」を伝えたい。だから、同じ貴重な時間を使うのなら、本格的トレインでのロング競技に、その準備に使いたい。そういう大会を開いてくれる主催者を応援したいと思うのだ。オリエンテーリング復活の鍵はここにあると思う。

甦れ「打倒関東」魂

瀧川 英雄（OLCふるはうす）

私が「打倒関東」と言い出したのは、実に30年近く前にさかのぼる。1981年、高校1年終わりの春、岐阜県での全日本が私にとっての全国デビュー戦だった。1カ所大きなミスがあり、結果はH15Aで十数位だった。上位は関東勢が独占。悔しくて「速くなってこいつらに勝ちたい」と思った。そこが私にとっての「打倒関東」の原点である。

高2の秋からは、「打倒関東」の思いを胸に、石川県での日本海2日間大会、埼玉の東日本、年末には埼玉でのスコードジュニア合宿ⁱⁱなど遠征を繰り返したⁱⁱⁱ。日本海2日間では、1日目は大きなミスをしたが、2日目は、H17Aで、当時同世代で最も早かった竹野（桐朋）

に次ぐ2位に入った。レース後竹野話しかけられ、「偉そうなしゃべり方のやつ」と思いながら、ライバル視されてきたことがうれしかった。続く東日本（越生・高取山塊）では、慣れないコンタリングに苦しみ H17A^{iv}で 10 位内に入れず、なかなか簡単に関東勢には勝たせてもらえない。

その後、年末のスコードジュニア合宿では、3 日間関東勢と走り、かなり互角に戦えるという感触を持つようになった。その合宿などで関東の高校生と話す中で出てきた案が、「翌春の和歌山での全日本の後で、関東・関西の高校生が集まる練習会をしよう」という構想であった。最初は練習会と言っていたが、どうせやるなら東西対抗をしようということになり、男子は上位 10 人、女子は上位 3 人の合計タイムで競う高校生東西対抗戦を開催することになった。今のインターハイの母体は、実はこの東西対抗戦なのである。

こうして運営やテレインの成算もなく開催を決めた東西対抗だが、自分たちも走りたいので、競技面ではチーム HO のみなさん、塚田さん（京都 OLC）、河合さん（当時阪大）、阿部さん（当時大阪市大）など多くの方の力をお借りし、何とか京都・將軍塚で開催できることになった。エントリー等競技に関わらない準備は、摂津高・千里高を中心とする高校生が行い、準備作業を通じて「打倒関東」の機運が盛り上がっていくのを感じた^v。

そして迎えた 1982 年 3 月。まずは和歌山全日本^{vi}の H17A。みかん畑の中のランニングコース。1 分後スタートの竹野に終盤追いつかれるも、再度振り切って僅差の優勝。その勢いのまま翌日の東西対抗でも連勝。そして団体戦。瀧川・福田のワン・ツーフィニッシュ、九州の雄曾根崎の活躍、そして「10 位に入って関西勝利に貢献」に燃えた北川（ふるはうす）の健闘などで、男子は予想を覆す西軍の優勝。西日本勢が「打倒関東」の旗印のもと盛り上がり、打倒関東の目標を結実させた。

翌年からも高校生東西対抗戦は、高校 OB が運営し全日本の翌日行う形で継続した。翌年は千葉全日本^{vii}の後、埼玉・高取山塊で開催。テレインをある程度知っている私は連覇したものの、西軍は惨敗。しかし、その後しばらくは関西の高校生 OL 界に「打倒関東」の目標は受け継がれ、その後抱・宇多・岡田・浅田・高木・土屋・河合などを擁する茨木高校の黄金時代へと引き継がれるのであった。

さて、高校卒業後、私は神戸大学に入り、大学レベルでの「打倒関東」を目標としていくことになる。神戸大学で団体戦優勝^{viii}を狙うのは現実的ではなかったが、大学 2 年の時からはインカレ^{ix}個人戦優勝、団体戦 6 位入賞を目標としてきた。しかし狙ったレースで思い通りの結果を出すことは難しく、2 年の日光の個人戦は気合が空回りして序盤で爆発、後半追い上げたものの 7 位に終わった。3 年の駒ヶ根は、あえて緊張を避けてリラックスして臨んだが不完全燃焼のまま 3 位。団体戦も 7 位、13 位と振るわなかった。その間、男子個人戦は塙、佐藤と東大生が勝ち、東大は村越さんからの連覇を 6 に伸ばしていた。

そして迎えた最後のインカレ。打倒関東、東大の連覇阻止の最後の舞台は愛知・三河高原。今ではおなじみの愛知県野外活動センター周辺のテレインが初めて開発された大会だった。個人戦は難解なコースと悪天候の中のミスも多い泥仕合となったが、私は中盤以降立ち直り、

悲願のインカレ個人戦制覇。翌日の団体戦でも、1走に起用した伸び盛りの橋本（現 OLP）が快走、あえて私が3走に回った走順^xも奏功し、6位入賞を果たした。

このように、私の高校・大学時代は常に「打倒関東」を目標にし続けきた。そして、その目標があったから速くなれたと思う。

大学卒業後、インカレで燃え尽きた感もあって、残念ながらここまで真剣にオリエンテーリングをしてこなかった。長いブランクのあと、40歳になって再開してから、また真剣に勝つためのオリエンテーリングをしているのは、全日本リレーという「打倒関東」の場を見つけたことが大きい。全日本リレーMSクラスで、東京や埼玉（広島や兵庫も）と戦う時には、学生時代の「熱い思い」が甦ってくる。そして、大学時代から全日本リレーがあれば、卒業しても目標を失わずにすんだかな、という気もしてくる。

競技としてオリエンテーリングをしている以上、「勝ちたい」「強くなりたい」という気持ちは誰もがもっているはず。ただ漫然とそう思っているだけでなく、自分より強いものを倒すという具体的目標があった方が、トレーニングをする力になる。打倒する相手は必ずしも関東とは限らない。五百倉くんにとっては「打倒東海」、栄森くんにとっては「打倒名大」かも知れない。でも、全日本リレーの大阪チームとしては、東京・埼玉ら関東の強豪チームを倒すことを目標に「打倒関東」の旗印の下で戦いましょう。私は今東京に住んでいますが、大阪チームで常に「打倒関東」の魂は持っています。

そして、「打倒関東」ときいて血が騒いだ大阪チーム以外のみなさん。来年度はぜひ大阪で選手登録（ふるさと登録でも）して、一緒に「打倒関東」を目指しましょう。

ⁱ 当時はMではなくHと表示していた。

ⁱⁱ 最近の「トータスジュニア合宿」のような内容で、村越さんや山岸さんら当時の日本のトップがコーチをしてくれていた。

ⁱⁱⁱ 高校生当時から大垣初東京行き「垣鈍」を使って遠征していた。今のムーンライトながら。

^{iv} 当時は高校生オリエンティアが多く、この東日本のM17Aは100名以上の参加があった。

^v この時の準備メンバーが、高校卒業後作ったクラブが「ふるはうす」である。

^{vi} パークO関西で使われた「四季の郷」と、確か最寄り駅は同じだったと思う。

^{vii} この大会ではH17Aの人数が多くてA1、A2に分かれるという空前絶後の現象があった。

^{viii} できれば京大で優勝争いしたかった、という思いを当時持っていた。その頃の京大の主力だった山根さん・辻村と今大阪チームと一緒に走れるのは幸せなことだと思う。

^{ix} 1年の時のインカレは個人レース一本で、Eクラスの各大学4名の合計タイムで団体戦が争われた。2年の日光で初めてリレーが導入され、個人（ロング）と翌日に4人制リレーという構成だった。

^x その頃は4人制リレーで「エースは4走」が定石だった。